

共古日録

二十二

Handwritten calligraphy in cursive style, including the characters "共古日録" and "二十二".



特別
15
1413
24



谷川吉清の
お塚

山鶴大威の書翰
を埋しとせ

根の... 縮み... 彩色した... の
手... 船... の... 色...
也... 共... 後... 柳... 園... 及... 下... 日... 奈... 久... 産... の... 人... 形... と... 志...
伊... の... 味... 三... 吉... 清... が... 友... 故... 塚... と... 志... 願... 三... 年... 句...
亦... の... 塚... を... 發... 掘... して... 吉... 清... が... 埋... の... 書... 物... を... 志... 願... と...
誠... け... した... の... あり... が... 何... 一... の... 志... 願... した... の... 好... した... の...
あ... 初... の... 理... の... ぬ... を... 志... 願... した... の... 志... 願... と...
甲... 斐... 中... 巨... 人... 即... 龍... 王... 村... の... 山... 鶴... 大... 威... の... 墓... の... 志... 願... の...
如... 志... の... 書... 物... を... 志... 願... した... の... 志... 願... と... 志... 願... と... 志... 願... と...
皆... 好... した... の... 志... 願... した... の... 志... 願... と... 志... 願... と... 志... 願... と...
か... 皆... 好... した... の... 志... 願... した... の... 志... 願... と... 志... 願... と... 志... 願... と...

竹の虎の水入二種

竹の虎の水入二種
ひび境



田子養次郎の書



紅
瓦
の
印

扇形の白の丸の瓦、
しし葉印の前の後、
紋瓦三枚、
天保一、
如き、
功、
以、
永、
と、
し



共
古
藏

伊勢万歳
能名清流

しきたる全紋二行
蓄思不倦
以取蕙

辛亥歲二月不成道人



千社多しのをせ記昔歎名流院と題す其年此本
刻も僅かあり今存す事とて大如伊勢萬歳
及その歳本の心とてお歳若あるもさうが伊勢萬
及お歳中講談ゆ桃林の面歳を可免す
清風晴風車業大人より送る物も今より有り予が

萬ふりしめ迄茶亭へ集合しておのれれれと人のれ
とせたりなほ川橋高き予の心ささる形し
晴風里より亭に園中桃林北枝まゝに松雪園
今歌画工もまた身層重其地あり久乃とて
とちの因り向身は予が古きとぬめは譲りぬ
梅子張りぬま張りの入か千社万別れの歌

明治三十五年辰十二月九日

駿河の山景

おのりまは北村自筆
清風と号す
放牛舎桃林戲
清風初め

徳州桂井村
法号寺
糸下

徳州の正印桂井村に在りて甲牧山法光寺の縁起一紙ありて其に
多都々右左法号の賜りたる文ありしが徳州の正印の
影写あり糸下中のものであると云ふ事ありしなり



正印と同じものなりと云ふ事ありしなり
糸下中のものであると云ふ事ありしなり

慶應二年の
糸下

其父右左の縁起書に金堂西
糸下中にもある事ありしなり

徳州の正印
糸下

同七年既産御
同八年由運橋石造りたる

持山の正印

三河の運橋

新島の正印
月日

元禄二年蒲島
ありしなり

徳州の正印桂井村に在りて甲牧山法光寺の縁起一紙ありて其に
多都々右左法号の賜りたる文ありしが徳州の正印の
影写あり糸下中のものであると云ふ事ありしなり
其父右左の縁起書に金堂西
糸下中にもある事ありしなり
同七年既産御
同八年由運橋石造りたる
三河の運橋
新島の正印
月日
元禄二年蒲島
ありしなり

武蔵野原即
大塚村



武蔵野原即大塚村也同仙臺即大塚

弥生式土器破片之
横塚

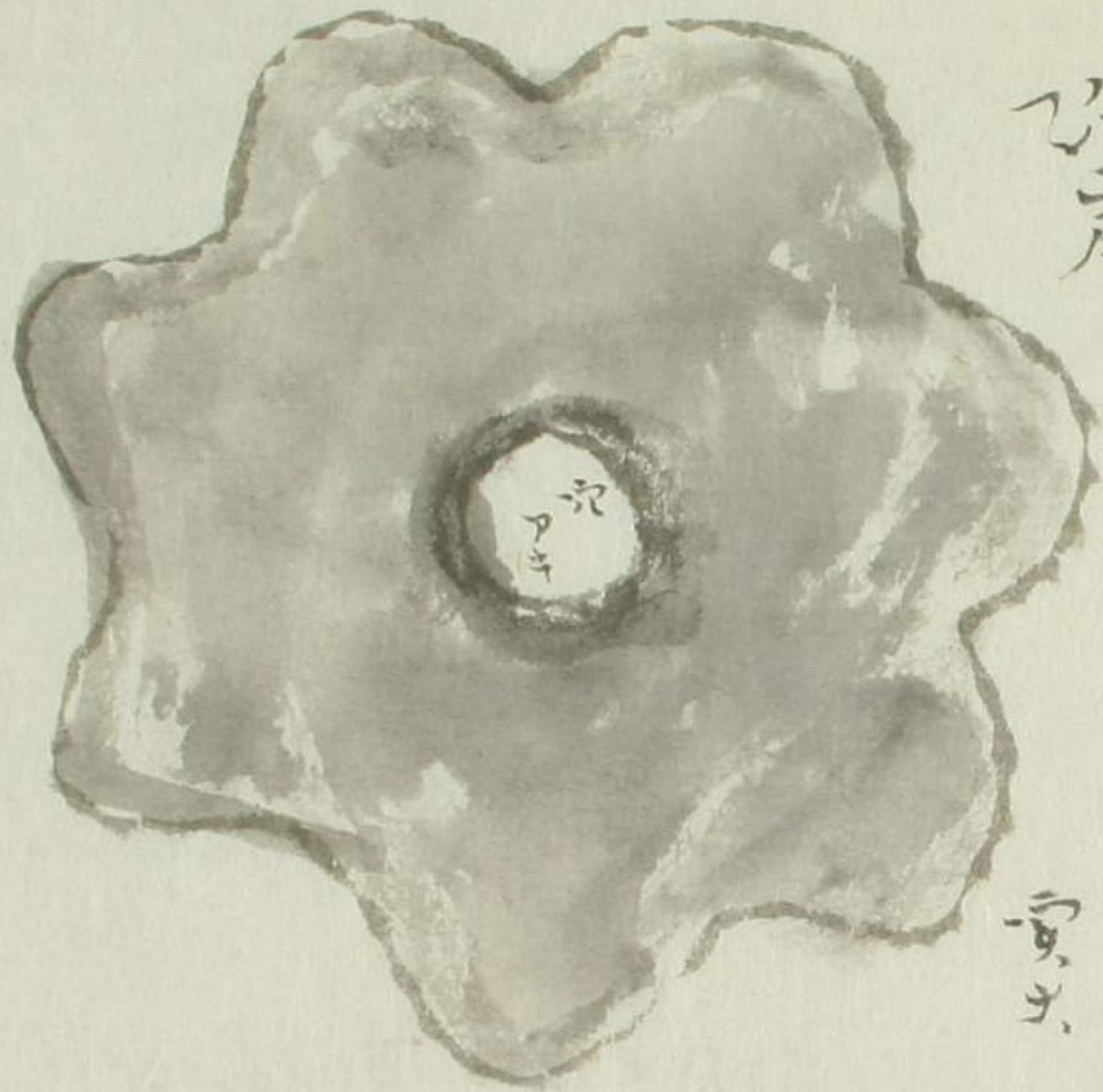
小金井精良氏
人類学會(寄)

大正三年二月五日
見之
總圖如次

武蔵野原即大塚村也同仙臺即大塚
弥生式土器破片之横塚
小金井精良氏人類学會(寄)
大正三年二月五日見之
總圖如次

如群の石

朝鮮咸鏡北道鐘城の鐘城邑五満
の岸



此形の石は群飛特産物なり如群
の石同形の



意面
の石



高十一又一寸
洞径九寸

身略三
ヨコト

世の瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて
提が三店と云ふ

の瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

梅舟店とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

木津屋とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

田端屋とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

三休三合の

八十八年母

信濃梅(瑞命)青瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

七葉しとて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

クニトシ梅とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

妹の瑞命の
家例

瑞命十二年とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命八年とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命承代とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命の瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

新永代
瑞命の瑞命とて言ひて其瑞命夫の別當の世ありぬ其別當屋也境とて言ひて

瑞命

大井川

大井川

おの葛筋の葛葉蒲の葛葉の起りに我に昔は
成香のこの花は女の根を弱く養生に
人々を喜ばせしむる也
昔三年春は江戸代官の文の
大井川に
おの井とふ人申す

大井川に越後守の御
和正の夜天元再
馬七十七文也馬
馬九十九文也
一。藤葉花の文化十年

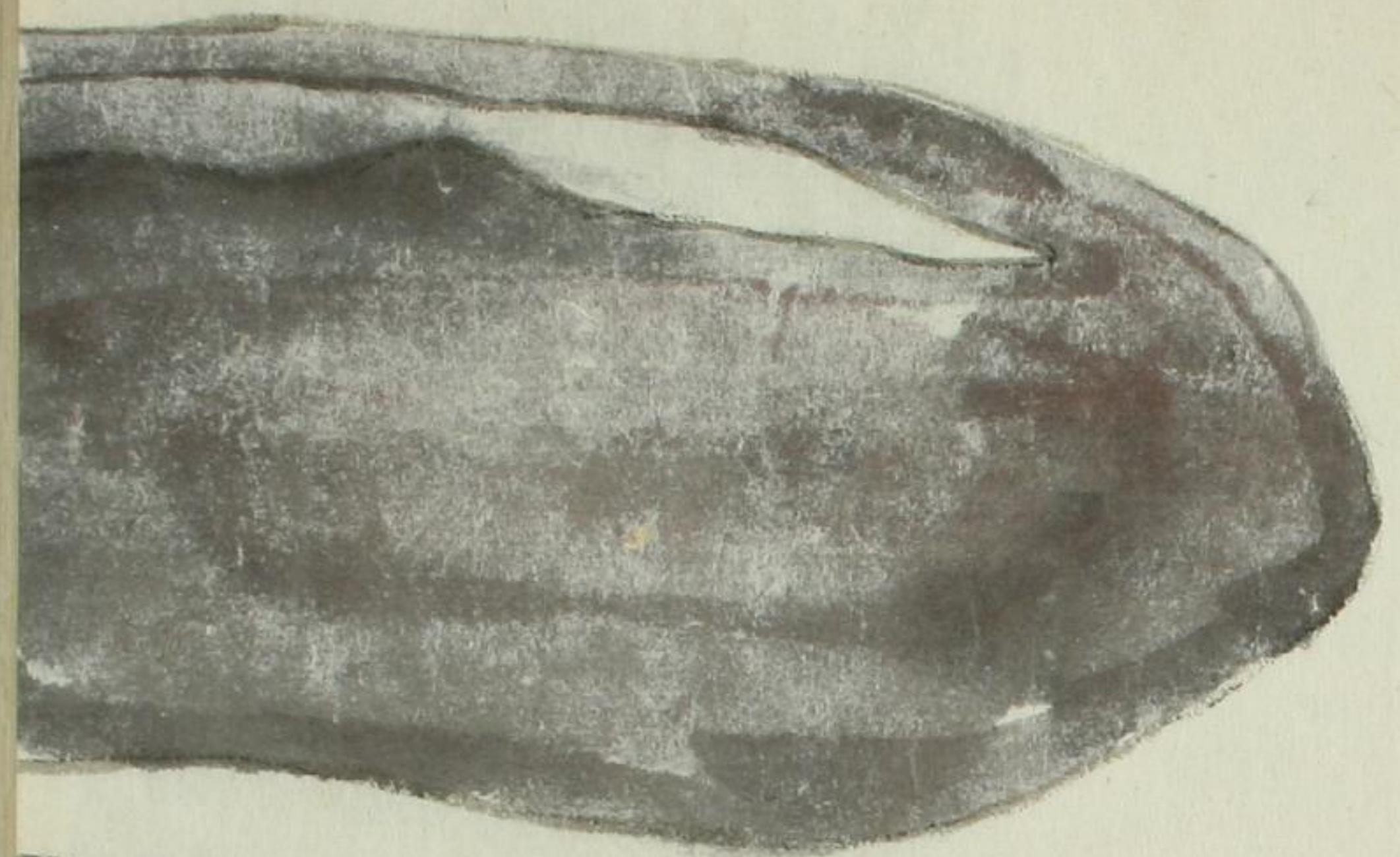
大井川

大井十年の板九十九文ある
大井三十三文の
大井の文は
大井の文は

大井の文は
大井の文は
大井の文は

大井の文は
大井の文は
大井の文は





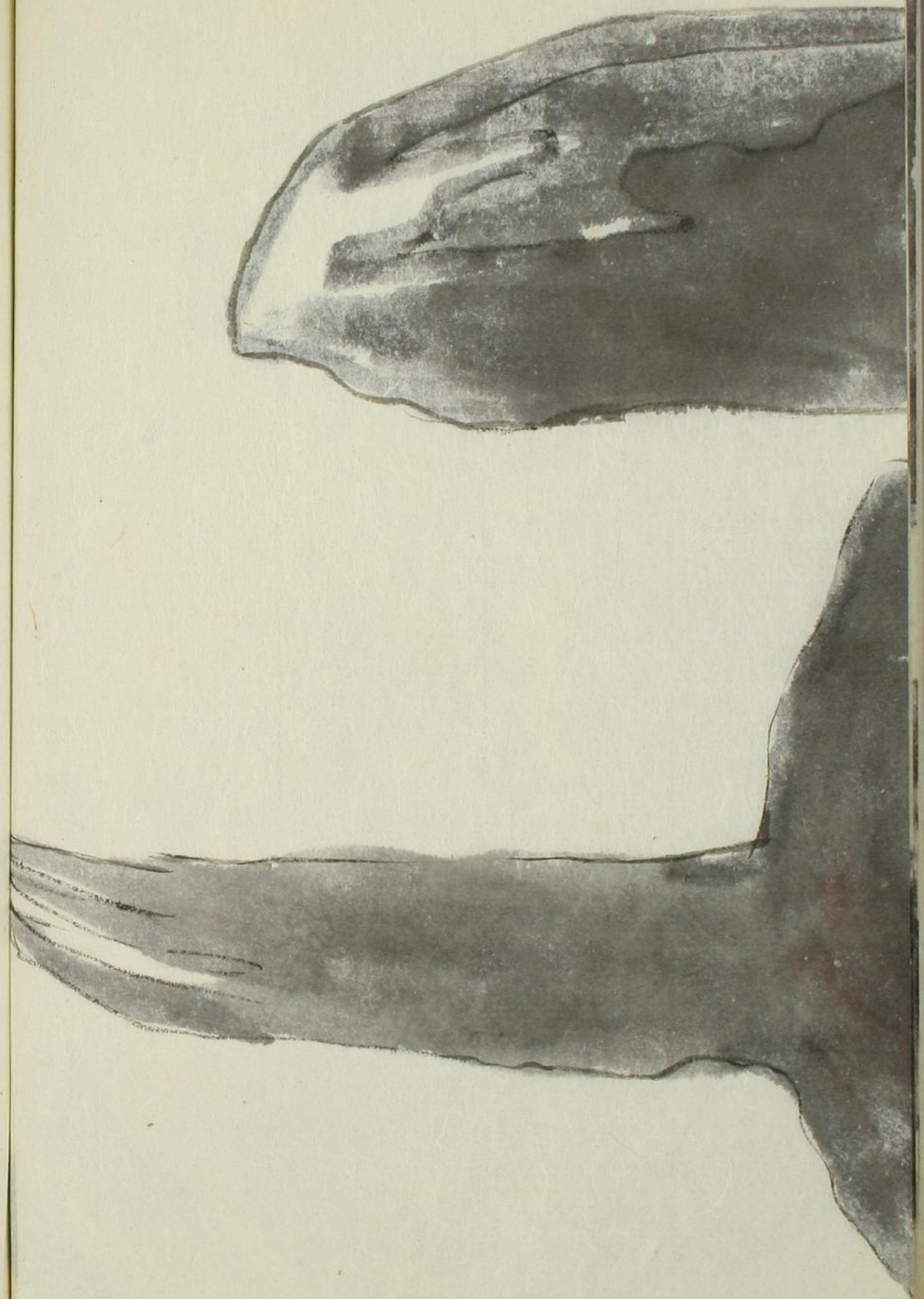
寛政四年
の事

伊勢の事
寛政四年二月
大坂の事

寛政四年二月
大坂の事
三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月

寛政四年
の事

寛政四年
の事
二月
三月
四月
五月
六月
七月
八月
九月
十月
十一月
十二月
大坂の事
伊勢の事
天保の神
田南の事



江戸屋の所載
昔京の女子

結川家蔵の江戸屋の所載の古京の女子の物語

貞享四年の江戸屋の所載の古京の女子の物語
大文 三十七文 かりし大文 三文 山崎金平の
つるのこゝ五文 三文 その下 鐵面文ありいささき

江戸屋の所載
名木也之
今に在るものあり

貞享四年の江戸屋の所載の古京の女子の物語
大文 三十七文 かりし大文 三文 山崎金平の
つるのこゝ五文 三文 その下 鐵面文ありいささき

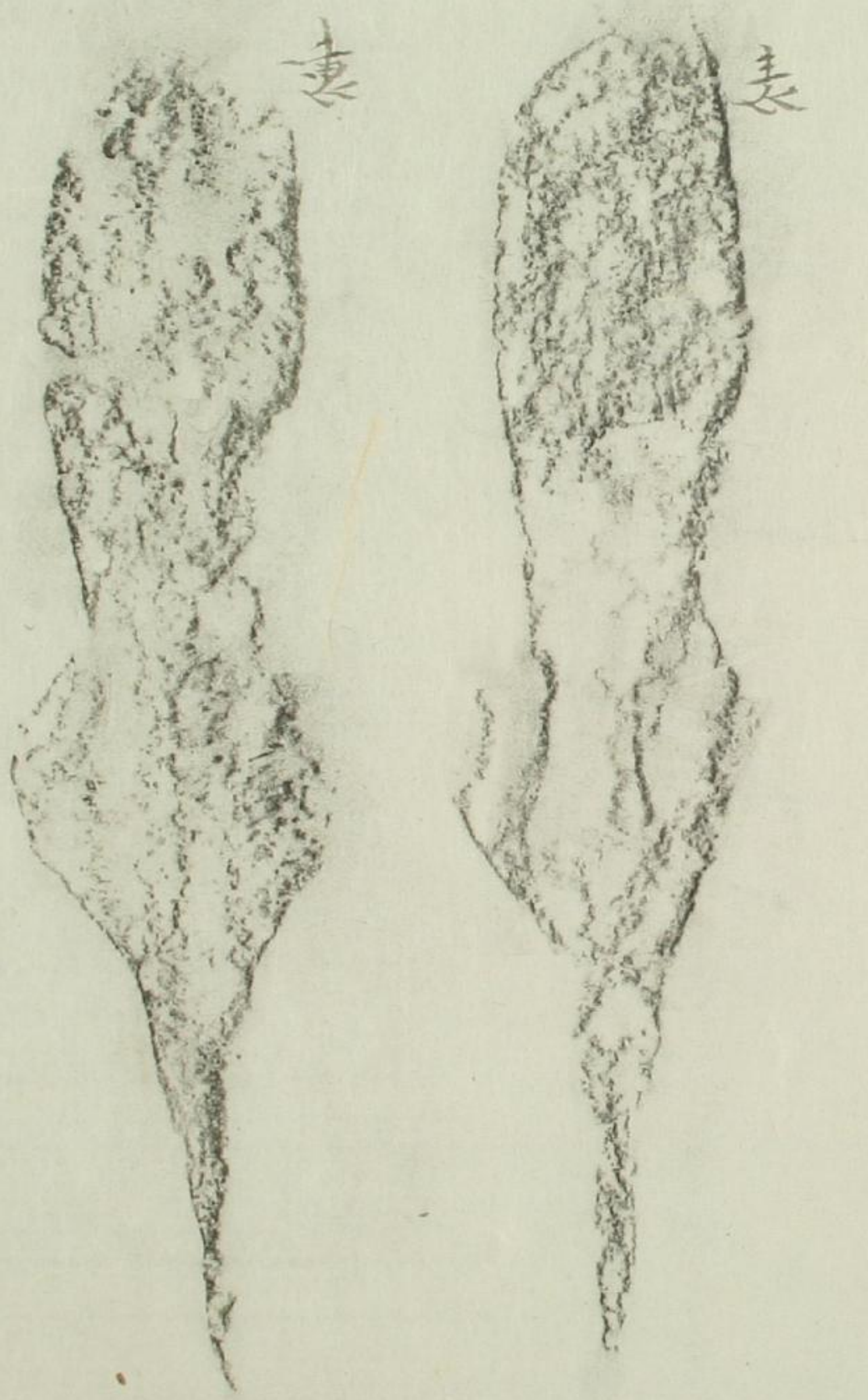
江戸屋の所載の古京の女子の物語
大文 三十七文 かりし大文 三文 山崎金平の
つるのこゝ五文 三文 その下 鐵面文ありいささき

牛の記
天の記

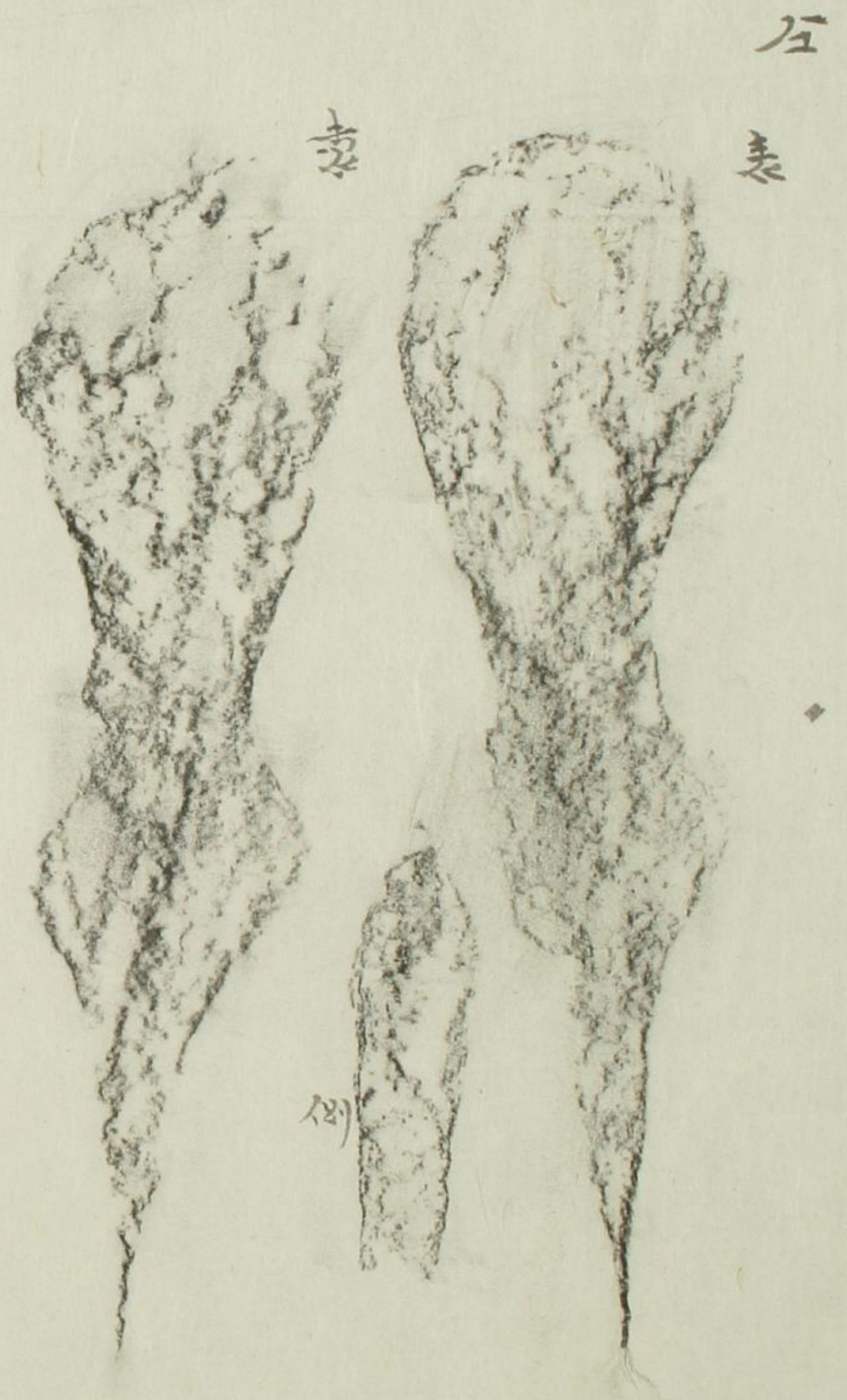
共
牛
記
天
記

連理のうま
木
牛
記
天
記

木
牛
記
天
記



大正三年二月十九日見之



新言 新編 鮮かなるん

日蓮作の書

三つあとのしく物かまふけり

物かまふけり
おの後の感化

越後

越後 天州年向女部の中

及顔 せきふととらふのよ

ヒシヤクとて花を細く流せ

おとわ物部古とて所より

まのし 群れとておの

若古とて物部古とて

横板の流ありしとて

一より物部の玉とて

血のわたりとて

園にたれた女年八月
中世のやせり其形
血帯もよりの利し
ふたふとあなう

文政七年九月十日獲

三河赤坂田畔

大如堂永鏡

三河赤坂とて



故人 赤坂の
あつたふとて
二つ割りりれが
珠とて言ひ見
ゆえ寶とて



共古より清く入道せしむるは学究の外
遠きと云く業を修むるの道はこれなり
一教にても守るべき事あり然るに
此れかごの南無とて学究せしむるは
一種の光りせぬものなり
二つありともある事あり
しめしむるなり

唐長檣の南無の語
七つありて夫人の語
男の白瓜をよめる
見せしむるをよめて讀むる日知を
田毎の月丸をよめて讀むる日知を

評返す
共古より明く入道せしむるは
夫人ありしが須く入道せしむるは
志望のあり望をばしむるは
此のねよりこれに類しむるは
精のなる善人かをばしむるは
男之中より内業をばしむるは
足す事ありしむるは
物と云ふの事ありしむるは
次ありしむるの事ありしむるは

ま

ふらふらと物かたぬめりてふらふらと春の夜と

まがりてくまし袖に其まゝの色づゝあゝ心

老いらくのえとをせがみたりと春の夜と

と病める業平の心もふらふらと春の夜と

かけしりのえとをせがみたりと春の夜と

。歎 在 春 仕 七

今春出国初勤番平日不忘君恩深身纏子織本錦鳥

腰帯短刀右京極常言我場討死事自誇鎧鈕免許

話軍書讀解在胸中申越練志氣不入角力番討少々好

芝居者故嘗不知又言申國殺生出旗本了術取不足

春作年

神作軍

鏡作佳

同當作目

見作是

精作痛

長屋の愛物見鏡の道懐故郷妻子情替寂思五金銀山

金銀山中美人多ふ勢奈香葉楊枝店夢露將子暖簾遮

生涯談寄一妙物姓一妙物二妙物又三妙物丑州鶴舌郎

八面善金邊皆知音心藏靴水端田川同見甘露器中

月鏡編新巾巻首長靴紋巾織挿腰短文晁墨画見桐

重田草茅書教中二物古渡更紗烟草入新吹南鏡

通田堂始知東都姫子年也夢ゆ囊中自無丸差替

大小瓶入藏外領紋取渡此人意番頼合又見合積

気腹痛二言碎一年物成半月長百日説話底一發

丑明の丑の横三吉原の奴様扇をナリ鶴舌の鶴舌横三同エ子
屋ナリ。八百善金邊の共三話意店に之を今尚アリ金邊横三今多
ニアリ。この蹴水端田川皆兩名。甘露の甘露梅ト多ナリナリ

いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江中ノ下ノ女も来ぬの事橋并 さまはらあはれ
の川に河津なる家ありて武士の切の若方ぬれぬ
あつた物橋橋せらぬあつた川切の切を武きたる物
しよと甘ひ川に書かする月書せり前北をいふ
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし

いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし
○近江女も来ぬ事知れぬあつた川切の切を武きたる物
いふ事か なる逆さ橋の若方よりあらせし

その又越女の若衆を金づからさうらひ世に施す也
うけお言ふ事し

昔古に水地を流ると云徳語まで下等婦妓の對し
好む仲を遊のそいれをちとて又
花より物女と云多々用ぬれ再結して玉代をさ
なしてなると

○昔古に女帝のおまゝに道中と云ふ系可なりはるか
前より所より系可(向ふ)よりわたり
○かうりうと云ふ同之を曆のひきまがたみ海白抜いん
なを流らせぬ流しぬがゆに別達きなる者からうりて
ゆいなるといひしう通ふと云われたり
○是れ女帝のおまゝに流しぬと云ふと油と云ふは葉の葉

れは道中と云ふ事ありては又此と云ふ事あり
中より上りて細く細く功細なる事
花の境を流す事ありては又此と云ふ事あり
ゆいなるといひしう通ふと云われたり
○是れ女帝のおまゝに流しぬと云ふと油と云ふは葉の葉

昔古に由忠と云ふ事ありては又此と云ふ事あり
徳前(徳)はたて食器と云ふ事ありては又此と云ふ事あり
○是れ女帝のおまゝに流しぬと云ふと油と云ふは葉の葉
か吸ひて美事と云ふ事ありては又此と云ふ事あり
○是れ女帝のおまゝに流しぬと云ふと油と云ふは葉の葉
なす又此と云ふ事ありては又此と云ふ事あり
○是れ女帝のおまゝに流しぬと云ふと油と云ふは葉の葉
道中として流すかくの如しは葉の葉

○ちまろふひこの言葉は女不愛見如場少るを詩
らぬといひきき

○かのもは底に浮くあり苦の火なる

○火のつを柄糸のそれたるせりなる世お初也の子と

ふいふ湖の初也前帳の籠の網の子すれははあつた

初也の子と云ふも縁のつなは前帳の向まより引か

てあはれかちと云ふ

○本はつひのあはれ女を金猫銀物とふは朱とを分の表

あはれは叶如にうらひよ比ふことさかたなるあはれ

世に流るる女はあはれはあはれはあはれはあはれはあはれは

昔古のつあはれ三年の昔葉は清徳山の婦美事葉鹿
子に三日月の如女と上中にて住しうよん一かといふ

○かき書女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

あはれ書つ書女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女の仇名を世の年しこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

用女つる世をく用女との遣いこはる者や若工者

共古より所従學習して習し然し大黒を強き丹を
大黒天の増え方の庫裡を養ひ天部をの増の
女房の庫裡を司り大黒をとり

○平方のさうい 相お世のもの足る用なる詞をサカイと
ふいぬのく さいひくとふが語又モノとよむとの中
ふふふのが語ある
○海らうらう 意みのひあむの海に紅をぶるといふ身
つばきのの ちをせ世の理のころあふのせ眼に鼻はる
とらうらうの ちをせとさうい
○共古は くらボウは敏根を押しつてさう筈まへう棒に
せくとふれしとさうい 兼ちの首をよめぬ好む棒

のらま 道にたのびのひ 辨言は勸告を人形子の古物に
さくさのあか ちをせとるのらまは 辨言のち
○海らうらう ちをせとるのらまは 辨言のち
ちをせとるのらまは 辨言のち
○共古は くらボウは敏根を押しつてさう筈まへう棒に
せくとふれしとさうい 兼ちの首をよめぬ好む棒
○海らうらう ちをせとるのらまは 辨言のち
ちをせとるのらまは 辨言のち
○共古は くらボウは敏根を押しつてさう筈まへう棒に
せくとふれしとさうい 兼ちの首をよめぬ好む棒

命をたてしむるにせしむるに
命をたてしむるにせしむるに
命をたてしむるにせしむるに
命をたてしむるにせしむるに

若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに

○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい

○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい

○もろくふれい

若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに

○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい

○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい

若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに
若古よりこれに

○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい
○もろくふれい

今御りて馬場の申をこつて木の枝をからすまの公の
 ありておししてのちの枝をからしむまの茶を計こ
 此茶をまがら茶をこふ其ぬ茶の右信濃を十次郎茶や
 ち身又西の方とふ茶をまがら
 一三島山亮の院の南のこてなる姓理十郎をこつての内
 除也りおわり東海乃三島大の院の本世に神木の河
 しの中ひ猿蛇とこつ蛇をまがら猿の顔のこまなる大なる
 蛇の身蛇をこつて根木のまのまのまをまがらとこつて
 一荒蒼山まがら
 一川高橋まがら又この中の舟より舟の舟の中ひの舟
 一西影まがら

川、こつてまがらこれまの北の橋をまがらとこつて
 一櫻川まがらとこつて南蔵院の今ひ橋をこつての橋をまがらとこつて
 今西の院のまがらとこつて
 一香又まがら今ひの川のまがらとこつて
 一紅葉茶をこつて南蔵院より南蔵院まがらとこつて左りの茶をまがらとこつて
 この橋を山川をこつてまがらとこつて
 今ひの院のまがらとこつて
 一南蔵院まがらとこつて
 一まがらとこつて
 一今南蔵院のまがらとこつて
 一まがらとこつて

のちいふなるを馬廻りとしこを馬存せしむる所
川島の名をえんよふをこたふし

一 大國寺屋の下の坂の中へありありと通念はらとつた
道の妙あり此より上のまに大なる松の木の向ふに新田

のまをたつをせしむる松の向ふに新田の向ふに三方の
標木に大なる松の向ふに大國寺の向ふに

ふれしとこをこたふし大國寺の向ふに松の向ふに
龜角を標木をたつ

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
沙汰をせしむる松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
の内に一里塚あり馬廻りは堂の向ふに

標木をたつ松の向ふに大國寺の向ふに
この松の下に松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
松の下に松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
松の下に松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
松の下に松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
松の下に松の向ふに

一 大國寺の向ふに松の向ふに大國寺の向ふに
松の下に松の向ふに

柳下は二軒あり
戸名は田口姓也

一尊司多々乃院石井山嶋勤修所景憲の木像也
勤修尉自乃局名也棟云々
し右より子に辨子云々又收心八歳生政乃木像也
ありしと云々又の嶋勤修尉村工左治等以八歳同會
の位牌堂あり其妻の云々

妙法 性智院慶安二〇五年通暖日將俗名村上庄次郎

妙法 倍曹院實元三癸卯年殿無角道牛俗名小幡勤若乃尉

妙法 法受院實元元年蓮心日歷俗名松山八藏

(同會三位牌、遺書)

小幡景憲者相州中依智村蓮生寺系之
村工昌宣 收山盛政者并干本行院
日蓮上人並六老儒者小幡景憲在世之
時為村工收山菩提造雕寄附于當時
武州僧司谷村本行院納 施主 收山八藏公憲

小幡勤修乃木像尉之部形云々
小幡勤修乃木像尉之部形云々
釋氏改号曰倍曹院無角道牛居士其靈像在

推司各火行院憲為曾祖父小憐孫次節在直後
 親為其兄景憲者甲陽兵學中興之祖普世所知
 也憲為雖小力恭得繼其道統傳於從藝州太守少將
 君而彼稱師範世門弟子不知其數因制一小室以
 敬以頌其敬尚享焉

其猶子小憐孫至一憲行其子小憐勤於學門意學其嫡小憐
 孫治考年訂憲為

元文五庚申二月二十五日

火行院歷代

南其 東陽坊日進大德
 先師 火行院日信覺位
 當坊初世 日性 大德

二世 日辰明十八年
 四世 日辰二月四日
 六世 日辰光院日瑞
 終光院日清

當坊 十世 常撫院日悻
 十二世 振運院日英三人

當坊 三代 日光大德

當坊 七世 日真 本行院日解
 九世 教光院日行

十一世 卷元院日敬
 十三世 竟慕院日祿
 十五世 當年院日圭

松山日鑑居士水滸廊銘

松山氏世以兵學仕講習武事家聲相繼連綿至今
憲章謂予曰先人八藏盛政者高橋氏之支族九州
名家來中國仕小早川氏數年後間小幡景憲善
通兵術為當世之巨匠其兒至庄次郎政宣謀共東
從景憲叩關其道遂以信服之執弟子之禮景憲亦
愛之情如父子乃致二人姓名見玉祢村正高橋稱松山然
其所以致之由莫有唐矣德華後二人有切語屋間之

厚聘以名固辭不應遊宴愈息不雜景憲之例
以至卒其身近也歎師若弟子者未向親厚如此政
定死無子盛政獨得其學先難後著信厚政名
曰日鑑造尚像一軀安是雜司谷大行院中其像
果露已久煤縹化憲章懼與父憲之共新制及
外櫃以藏遺顏蓋盛政美事極多二百年後
無能傳之今但拾遺事之概而以識其櫃扉爾
之化七年春三月

同藩廣瀨曲記

文化七年庚午五月

白河公孫臣 軍家五世孫

松山八藏實三郎 附三

寛文元年五月

法受院蓮心日親居士

俗名 松山八藏盛茂

行年 七拾八年

右同金子理平次直徳遊僧司各記金子父所撰以為拾遺

南原子

此拾遺一冊三田村玄龍氏藏本ヲ借受テ寫入田南原の寫本也在工野圖書館
其他之ヲ無シトス
大正三年二月廿六日寫

明治二十二年三月
十月五日
法受院

明治二十二年三月五日以前火ありて一冊坊主ありて書物せり

一冊ありて書物せり

火ありて書物せり

同年四月の抄書等語あり

新編の唐書ハ國史の秘玉護摩也にうさぎヤ勉強四ツリヤ
龜小徑藥場たるは胃散ヲ女中庵留生堂の守田の二玉丹請
婦湯後約の出板に近火のか礼ヤ轉居に見せびらき
當の流りの抄書馬車ヤ書物せり
氣日支の抄書ハ可筆抄書也
と婦姑の唐書ハ可筆抄書也
抄書ハ可筆抄書也
抄書ハ可筆抄書也

日王支路也亦多又なるの

根津の戸部より五ノ輪よりサラハツク虎の尾免に加賀の
の事籍居屋敷初場所尾の二蛇の押鳴半馬舎所未
二谷の敷居や芝居が様々可鳥越中村座火加兼房
所でか獅子の丸一樽如所
當の免死を申す冊の書跡を有とありの如く盛ん
か今蛇一たり又五の詞にて大山の今をばぬの
蛇の官史勢より都もぬ。那の官史 幾種の勢略の
風 凡俗樹の聲官。七 今の瓜出所。猫 舞妓
護 膠王。凡俗玉七二。地震 見職。電信 亥
一 廿八年に成り不印申す同姓 川光史の向帳ありなり
の向帳より同姓申す同姓 川光史の向帳ありなり

四十八年六月のあらの浦新島等の事

司の成りし敷くが言從二人カキ三馬とて
或られたはちが氣なるさすなりとさすうかどしとさす
此の未髪者なるをあげてきたれは、右の坊屋
師の心算を様白すしては、終ふ者起り徳に
やふののちなりと、ふの都々
テウの届がひきまる未髪したる向のあてが
眼をさした

髪はまの眉毛をさして 鏡照れつけする内職
未髪はひかりの向かひ 髪をさす
未髪はひかりの向かひ 髪をさす
未髪はひかりの向かひ 髪をさす
未髪はひかりの向かひ 髪をさす

東髪此のしるし

東の浦東の髪子に到るがてらるる衛生の徳に

終始の清潔をかきつるは此の丸猫とけ

不鮮の気化をみるサツサをよかどい

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

西髪奇に見やうとせき書ゆい馬東髪有けり

廢物、因循の中道院教、能多る、分道、如、漢、方、爲、
暖、心、成、す、す、り、た、多、一、惡、病、男、の、結、髮、一、命、男、子、の、不、得、く、ら、
的、か、ち、あ、つ、た、楊、馬、場、女、の、志、ま、う、す、た、今、今、一、年、考、り、大、き、い、
一、年、考、り、由、た、話、五、一、年、の、撮、婦、の、可、れ、カ、ン、ガ、ウ、ガ、ン、の、成、る、親、者、
眼、力、で、遊、ぶ、政、黨、神、を、い、く、が、不、成、一、之、の、お、か、へ、り、く、神、田、流、
九、つ、た、あ、つ、た、り、手、の、用、の、以、り、妙、漢、學、(觀、鮮、射、月)
一、八、年、十、月、十、九、年、初、末、の、の、ち、り、及、廢、物、な、り、
一、年、考、り、解、せ、ぬ、も、の、の、あ、い、い、な、の、ま、記、一、年、考、り、及、廢、物、な、り、
一、年、考、り、ガ、ン、ガ、ウ、ガ、ン、の、成、る、親、者、を、一、年、考、り、解、せ、ぬ、も、の、の、あ、い、
一、年、考、り、周、圍、の、之、せ、ら、り、排、い、り、な、り、し、ら、
十、九、年、考、り、ぬ、れ、島、と、ぶ、物、ぬ、れ、ら、ぬ、島、考、り、せ、り、甘、の、の、ぬ、
あ、い、の、の、か、ね、は、一、年、考、り、ぬ、島、

十九年三月、改革の、の、い、下、つ、た、も、の、は、據、の、位、に、入、力、年、
一、年、考、り、一、年、考、り、の、火、心、急、す、一、列、の、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、入、職、一、年、考、り、官、吏、免、職、多、人、故、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、ぬ、島、と、ぶ、物、ぬ、れ、ら、ぬ、島、
十九年七月、改革の、の、い、下、つ、た、も、の、は、據、の、位、に、入、力、年、
一、年、考、り、一、年、考、り、の、火、心、急、す、一、列、の、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、入、職、一、年、考、り、官、吏、免、職、多、人、故、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、ぬ、島、と、ぶ、物、ぬ、れ、ら、ぬ、島、
一、年、考、り、一、年、考、り、の、火、心、急、す、一、列、の、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、入、職、一、年、考、り、官、吏、免、職、多、人、故、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、ぬ、島、と、ぶ、物、ぬ、れ、ら、ぬ、島、
一、年、考、り、一、年、考、り、の、火、心、急、す、一、列、の、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、入、職、一、年、考、り、官、吏、免、職、多、人、故、考、り、一、年、考、り、
一、年、考、り、ぬ、島、と、ぶ、物、ぬ、れ、ら、ぬ、島、

馬のりせしゆえりらのこまきいあらきし

同年九月のねりこ天知才林免死のこらるし

此の盛んまきし免死をなすし

免死を耳より集むるがさし

天知書林は愛宕山並く巡り

南化の先道可あき天知書林

又子の免死月極で書きし籍

考あり

二年二月のねりこ一掃為退職交代の右由は

當のなみ二箱うりぬゆきくちりぬなは

同年七月のねりこ

越前早野専賣のやき靴

おみゆるれぬ氣で書きの大和靴

大和どうなりのみりあり

たれん玉團地書きの藤月若

餅まきつあぬ書きの精米若

五年地つあぬ書きの精米若

一書きの春のあひらなかくくらすく白のあき

二年九月のねりこ世に人書き印を押し土倉

がらる行りりやなにかいおたり又

名取自稱若者がらすあ

又お平若れやをうりぬゆきくちりぬなは

二年十月のねりこ品は古川倉庫に手拭合あり

久一首の下の三つをえせり例せしむる可し
いし斜巻物而印「た」ありの「の」をい
かゝれよとせしものなり

廿年十一月の初旬に「静」なるの代り「鏡」持まじき

廿年十月の初旬に「髪」結の名称

丸盤 女史盤 高田 エケ巻 下巻 曲糸

文殊盤 銀香返 松葉返 自然餅結 下巻 連三返

三ッ輪 福三雀 割屋子 兵庫 木まこ ちたらぬ

以二十八の夕結あり

同年四月の初旬に「静」なるの代り「鏡」持まじき

親書の二に三の三に三社保の四に公園也矢場の婦三書れ
との言葉四季の更山衣履人先高はよけれは光の
はくろか書いひまうサツサ堂いひまうあいなや
真字の八造高にのるかり

よく見たら山人造の面をてあて
成るの面をてあて

成るの面をてあて

成るの面をてあて

廿年一月嵐をきるなり

根柢磐也すさき

招集の趣女場中

招集の趣女場中

ハ幡橋元也又まゝ今盛にうた格別じやないか
言ひ茶(茶)葉名抄(茶)さぐりな中に新設の幡橋の根株の節
物特来して色玉香玉ある花の里甚だ物連恋風はこちや
出れて居るわいな

二十一年七月の如く星
西郷の方にかやく西郷

西郷の年何年なり
二十一年二月方格をかえられた(當時有名の料理店)

西郷の料理店に道二の幡橋の物本亭三の山谷の八百番
四が吉原の金子亭五ツ生精六の幡橋の植半七ツ徳兵衛八ツ
加八百如いれ今春の如本橋當の敷子色着は原百天
美多亭也原伊世源青柳川長平清方梅新花に表清
采芳亭なり

廿年四月方格をかえられた店あり

西郷市ハ子如店土の店ハ如幡橋新葉のころ店定葉
春店ハ細端の貝柄店ハの幡橋植木店土物店
物也ハ横橋の音店ハ限的の木原店魚が心
は物本店肩毛ハ銀店成程あつても多量のだにいな

廿年八月格

病火うらう格(病)の如く
美好の如く結果た猪苗代
不意に格(病)の如く山陰が
幡橋が破烈の如くなれ
幡橋の如く傷多かり廿年の七月日なり
廿年九月年迄改めぬわいな其也

新令の道なる有道ののほふ

「ヤッて卒道」よりなる道のり

「あまのり」よりなる道のり

「新道の道」よりなる道のり

「新道の道」よりなる道のり

「新道の道」よりなる道のり

「新道の道」よりなる道のり

「新道の道」よりなる道のり

元年十月の如く

禁制の世に二三の書が

元年二月の如く

元年二月の如く

五錢上等銅貨の製造

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

九年七月の如く

（新道の道のり）

西暦一九三三年五月二十日
五月二十日 能登 友通 紅毛 親存 又その後の
西暦一九三三年五月二十日 能登 友通 紅毛 親存 又その
西暦一九三三年五月二十日 能登 友通 紅毛 親存 又その
西暦一九三三年五月二十日 能登 友通 紅毛 親存 又その
西暦一九三三年五月二十日 能登 友通 紅毛 親存 又その

共古日録 二十二

目 三十八

昭和四年六月一日



25
2-5

Handwritten characters in the top left corner, possibly a date or address.

Handwritten characters in the top right corner, likely a recipient's name or address.

Handwritten characters in the middle left section, possibly a message or address.

Main body of handwritten characters in cursive script, likely the primary message or address.

Handwritten characters in the bottom right section, possibly a signature or name.

